

The English Department Newsletter

関東学院大学文学部 英語英米文学科ゼミナール連合通信 第4号 ● 2016年1月12日発行

CONTENTS

- ② 英語劇『ヴェニス商人』
サービスラーニング体験記
- ③ バディ体験
交換留学生との交流
- ④ 留学生座談会
ゼミ対抗スポーツ大会
- ⑤ 教育実習体験記
- ⑥ 学生メンター
英語勉強法
- ⑦ 就職活動体験談
- ⑧ 卒業論文発表会開催予告
TOEIC-IP実施予告
Vista

「ゼミナール通信」挨拶文

英語文化学科長 西原 克政

英語英米文学科は、本年度から英語文化学科という名称に変わって、新しい歴史の一步を踏み出すことになりました。6月23日(火)、釜利谷キャンパスで、ハワイ大学付属カピオラニ・コミュニティ・カレッジからレオン・リチャーズ学長ならびにタカシ・ブランドン・ミヤキ氏をお迎えして、本学の国際文化学部の大橋一人学部長との間で、学生および教職員をふくめた学術交流を深める「基本合意書」(MOU)の調印式が、執り行われました。今後、2016年度の秋学期から約5か月間、ハワイの快適な気候の中で、大学入学後の早期から留学によって英語を磨くチャンスが増えたことが、大きな収穫につながることを望んでいるところです。

すでに、カピオラニ・コミュニティ・カレッジは、これまで文学部の国際交流プログラムとして、ハワイの大学の日本語の授業で、学生たちが日本文化を発信するプレゼンの機会を与えていただけてきました。そして、本年度は夏休みを利用したサービス・ラーニングは、ハワイ大学マノア・キャンパスで、金森強先生が引率されて実施されました。日本からの観光客の多い安全な場所というのが、観光であれ勉学であれ、重要な選択の決め手になると思われます。それにしても今年度のプログラムは、ハワイ一色に染まった感じがしているのは私だけではないかもしれません。それだけ、アメリカの銃器社会のありようが、本土で深刻な事態になっているのとは比べると、留学には安心して行ける場所ということが最優先されるべきであるのが当然でしょう。

そして、海外留学での環境を日本国内で疑似体験するという趣旨で、やはり2016年度から、ネイティブの専任教員であるジョセフ・マキーム先生を中心にして、非常勤のネイティブの先生も数名加わる形で、「イングリッシュ・キャンプ」を実施する予定になっています。これは授業の一環ですので、参加者が少ないと、せっかくの良いプログラムも流れてしまう恐れがあります。カピオラニ・コミュニティ・カレッジへの留学も同じことがいえます。というわけで、多くのおみなさんの参加をお待ちしております。



カピオラニ・コミュニティ・カレッジとの交流

釜利谷キャンパスに6月23日(火)、ハワイ大学付属カピオラニ・コミュニティ・カレッジからレオン・リチャーズ学長とタカシ・ブランドン・ミヤキ氏が訪問され、本学の国際文化学部との間で、学生と教職員を含めた今後の学術交流を深める「基本合意書」(MOU)の調印式が行われました。写真は、大橋一人国際文化学部長とレオン・リチャーズ学長との調印式の模様です。



その後、金沢八景キャンパスで小河陽学院長とレオン・リチャーズ学長と短い時間ながら懇談のひとつが持たれました。学院長からハワイ大学の機構についての質問等がなされ、ハワイ大学には10ものキャンパスがあり、カピオラニ・コミュニティ・カレッジが7つのコミュニティ・カレッジのなかでも最大規模のものであることなどが披露され、なごやかな時が流れました。

今後、国際文化学部としては、特にハワイへの留学を希望する学生に、多様な留学のプログラムを提供しているカピオラニ・コミュニティ・カレッジとの連携を深め、ひとりでも多くの留学生を送り出す機会を提供できるよう、来年の秋学期から実施できるよう体制作りを鋭意検討していきたいと考えています。
(英語文化学科教授 西原 克政)

英語劇

The Merchant of Venice

by インターナショナル・シアターカンパニー・ロンドン

2015年5月15日に金沢公会堂にて、インターナショナル・シアターカンパニー・ロンドン (ITCL) による、英語劇が行われました。今年の演目は、シェイクスピア原作の中でも名高い喜劇『ヴェネスの商人』でした。この劇団を招致するようになり10回目となる本公演では、学生だけではなく一般の方々も大勢参加され、観劇を楽しめました。

公演終了後にシャイロック役のギャレス・デイヴィーズさんとポーシャ役のキャロライン・コロメイさんに、福圓ゼミでインタビューをさせていただきました。

— どうやったら、一人で何役にもなりきれますか？

キャロライン：ただ楽しむだけです。私にとって、役を入れ替えるのは簡単なことです。衣装で見た目を変えて、舞台に出る前に自分自身を準備して、「私は召使い役だ」のように入れ替えます。

ギャレス：物理的な見た目を変えて、3つの役を演じ分けています。衣装がその助けになるのはもちろんですが、立ち方などの見た目でも違う役を演じ分けることができます。

— 長い台詞をどうやって覚えるのですか？

ギャレス：動きながら覚えます。また、まずは最初の行を覚えて、次に2行目を覚えて、最初から言うてみる……というのを徐々に増やして練習します。動きながら繰り返すというのが私のやり方です。

キャロライン：違ったやり方で繰り返すのも良い方法だと思います。抑揚をつけずにワントーンで話す、弱強五歩格で話す、歌を歌うように練習する、音節ごとに弱強をつけて話す……のように、言い方を変えて繰り返すと覚えられます。

ITCLは6人の役者による公演ということで、少人数ならではの苦労があるのだろうと私たちは考えていましたが、人数の少なさを感じさせないほどの迫力で素晴らしい劇でした。その裏には、一人何役もこなすコツや長い台詞を覚えるための工夫があるのだということを、インタビューを通して私たちは知ることができました。

(英語英米文学科4年 遠藤 玲奈)



サービスラーニング体験記

2015年8月31日～9月14日までの15日間、「ハワイ文化研究&サービスラーニングプログラム」に学生リーダーとして参加してきました。サービスラーニングとは、以下のように定義されています。“Service learning is a cycle, a praxis, in which the student builds upon classroom learning by applying skills to real situations in a community; the student then returns to the classroom with “hands-on” experience in the field and is able to better question and contribute to the class.” 私たちはハワイ大学のキャンパスライフを体験しながら、現地のコミュニティの協働活動に参加し、英語を実際に使用しながら課題・問題解決に取り組みました。

研修中はハワイ大学の教授によるハワイの歴史や文化・サービスラーニングなどに関するレクチャーを受講しました。また、大学外ではフィールドトリップやボランティア活動をし、英語力やコミュニケーション能力を磨くことができました。今回は学童保育での「絵本の読み聞かせ」、小学校での「日本語授業のサポート」、デイケアセンターでの「介助支援活動」などのサービスラーニング活動をしました。素敵な仲間たちと社会に奉仕できたことは、この上ない喜びです。将来教育に携わりたい者として、この経験を活かし、日本だけでなく世界でも活躍できるような英語教員を目指していきたいです。

(英語英米文学科4年 小柳 彩)



ハワイ大学のキャンパスで見た虹



子どもたちとの交流



最終日にハワイ大学の修了証書をいただきました！

バディ体験

バディとは、本学に交換留学生として訪れている海外の学生の日本での生活をサポートする国際交流ボランティアの一種です。今年からは、アメリカからの留学生だけでなく、ロシア、中国、台湾の4カ国からの留学生、総勢15名をバディとして担当することになりました。

バディは本学の様々な学科から約40名以上が登録されています。日本語のアシスタントや勉強に加えて、一緒に買い物をしたり、おすすめの場所を紹介して一緒に観光したりと、40人いれば40通りの関係の築き方やサポートの仕方があります。月に少なくとも1度は全体で集まる機会が設けられていますが、それ以外にも各々で活発に交流をしています。

昨年も私は約3か月ちょっとの時間をバディとして留学生と過ごし、その後今年の3月から約5ヶ月間カナダに留学していました。留学を本気で目指そうと思ったのは、去年のバディ活動がきっかけの一つでした。留学中はもちろん、今でも去年の留学生たちとは連絡を取っています。今年の留学生とも必ずそういう関係になれると思っています。去年バディを経験し、また留学生として海外での生活を経験している私だからこそ、バディリーダーとして、40名を超える本学学生の“国際交流したい”という気持ちと15名の交換留学生の日本での生活の不安やわくわくした気持ちとをうまく結び付け、お互いに成長を感じ、充実した時間を過ごすことができると思います。

最後に、バディに登録している学生以外にも、国際交流に興味がある方はぜひ積極的に留学生と交流する機会を探してください。留学生もたくさんの日本人学生と友達になりたいと思っています。国際交流を通じて得られるものはたくさんあります。それ以上に世界中に友達がいるということは広い価値観や視野を持つことにつながります。

(英語英米文学科3年 川添 誠矢)



留学生の誕生日パーティー



ホストファミリーも参加したハロウィンパーティー

交換留学生との交流

秋も深まる頃、国際センター主催の「留学生親睦バスツアー」が行われました。行先は山梨県で、観光と「ほうとう」作りを楽しみました。留学生25名、日本人学生11人が参加し大変にぎやかなツアーでした。今回参加した留学生の国籍は中国、台湾、ベトナム、タイ、マレーシアでその大半が中国からの留学生です。バスが発券すると皆それぞれ知り合い同士でおしゃべりを楽しんでいる様子でしたが、初対面の人とはまだ打ち解けない状態でした。バスが到着した後は、記念写真の撮影。皆にとっては思い出となる素敵な写真が撮れました。さて昼食では、自分たちの手で「ほうとう」を作るという今回のツアーの企画。「ほうとう」のことを初めて知ったという留学生も多く、「ほうとうっておいしいの？」と尋ねる学生もいました。留学生は初めて見る「ほうとう」に興味津々で、特に鍋に入れる味噌に関心を示していました。昼食の後は昇仙峡を歩いて観光しました。皆手にはスマートフォンを持ち写真撮影に夢中で、友達との思い出作りに多くの時間を費やしていました。山梨県で最後に立ち寄ったのがフルーツ公園です。そこには足湯があり、留学生も日本人学生と一緒に和やかに浸かって、旅の終わりを惜しまました。こうして山梨県を満喫した帰りのバスではぐっすりとする学生が多かったです。最後に撮影に協力していただいた学生の皆さん、ありがとうございました。

(英語英米文学科4年 福原 佳菜美)



留学生座談会

アーカンソー大学に約4ヵ月留学した岩川哲也さん、リンフィールド大学に約5ヵ月留学した西野彩茄さん、サスカチュワン大学に約5ヵ月留学した川添誠矢さんに4年生の伊藤亮介さんがインタビューをしました。

Q1. なぜ留学しようと思ったのですか？

岩川：学生時代に何か残したいという気持ちがあって、好きな英語のスキルを向上させるために行こうと思いました。日本に居ても大きな成長はないと思ったし、自分の視野を広げるという目的もありました。

西野：私は高校の頃からずっと行きたかったのですが、普通科の高校で留学制度がなく、大学入学後に行くしか手段が無かったので…大学でやっと夢が叶ったって感じですね！

川添：留学するまで海外に行ったことはなかったけれど、英語が好きで海外への憧れみたいなものはありました。中学の頃から教員を目指しているので、そのための英語力の向上には良い機会だと思い留学しました。



Q2. 留学先でいちばん苦戦したことは何ですか？

岩川：スピーキングですね。もともとスピーキングはあまり得意ではなかったのですが、苦勞した甲斐もあって、最終的にはスムーズに喋れるようにはなりましたね。

西野：初めの1週間のリスニングですね。私の留学先では、寮に入る前に1週間ホームステイをするんですが、そこの人たちの喋りが速くて速くて…。何を言ってるのか分からず、理解するのに必死だったあの1週間が一番過酷でした(笑)。

川添：僕も西野さんと同じくリスニングで苦戦しました。速くて何を言ってるのか分からなくて…。こちらから言うことは多少文法が違っていても理解してくれるんですが、結局は相手の言うことをちゃんと聞いて、理解できないと会話が成り立たないので、この点は最後まで苦戦してましたね。



Q3. これから留学を考える学生たちへのアドバイスをお願いします

岩川：一番ネックなのはお金の問題だと思うのですが、自分で行ってみたいと思ったのは、やはりお金では買えない価値があるということでした。何よりも“留学したい！”っていう強い意志があることが大事だと思います！

西野：怖くても自分から積極的に前に出ていく意識は必要だと思います。誰でも初めは出来ないのが当たり前。挑戦してみないと自分を変えることはできません。出来ないからといって「あー自分はダメだ」って思わないで、行動するべきじゃないかなと思う！

川添：留学に行くだけで、みんな英語が喋れるようになるわけではありません。留学先でも向上心をもって生活して、“留学”という貴重な体験をする機会を与えてもらっていることを忘れずに最後まで勉強してほしいと思います！



皆さん貴重な体験談を、本当にありがとうございました！

(英語英米文学科4年 伊藤 亮介)

ゼミ対抗スポーツ大会

毎年恒例となっている大橋ゼミナール VS 草山ゼミナールのスポーツ交流会を、11月13日の金曜日5限に行いました。今年度の種目は、昨年度と同じバドミントンとバレーボールでした。バドミントンは6コートに分かれて、各ゼミの学生がペアを組み、進めていきました。ウォーミングアップと親睦を深めるという趣旨で行われたバドミントン。最初は少し盛り上がり方が足りない印象でしたが、少しずつ打ち解けられ、みんなの体も関係も少し温かくなったところでバレーボールに種目を移しました。ここからは各ゼミでのチーム戦となるので、プレイしている学生だけでなく、外で見ている学生も自分たちのゼミを応援していました。ラリーが長く続いたり、アタック、ブロックが決まったりと、本物のバレーボールの試合を見ているような場面もあり、大いに盛り上がりました。結果は、大橋ゼミナールが4年ぶりの勝利！



今後は、より多くのゼミでこのようなイベントがあってもいいのではないかなと思います。私も今回のスポーツ交流会で今まで知らなかった人と交流することができました。来年以降、より大きなイベントが企画されることを楽しみにしています。

(英語英米文学科4年 平和樹)

教育実習体験談

今年度教育実習に行った大橋ゼミナールの4年生の亀井さん、斉藤さん、仙道さんと教育実習を体験して感じたこと、今後教育実習に行く後輩たちへのアドバイスなどを座談会形式で話しました。教育実習に行く学生さんにはぜひ参考にしてほしいと思いますし、教育実習とはどういうものなのかということ、教員志望ではない学生さんにも知っていただければと思います。

Q1. 教育実習に行ってみていかがでしたか？



仙道：率直に言って、大変でした。生徒との関わりはすごく楽しかったし、今後に活かせることも多かったのですが、職員室のなかでの空気は耐え難いものに思えました。

平：教員の方たちの中には「どうせ免許目当てでしょ？」という態度で接する方もいて、初めの頃は本当にきつかった。でも、3週目の研究授業（多くの先生方に授業を見て評価していただく授業のこと）が終わったら実習生に対する扱いが少し変わったような気がします。

亀井：私の場合は、先生と生徒の空気が本当に良くて励まされました。うまく英語で話すことは出来なかったけれど、英語を使おうと頑張ることが出来たと思う。最初と最後の授業では全然違うね、と褒められたことが嬉しかった。

斉藤：私の場合、先生方が優しくしたのはあったけれど、自分自身ができないことは本当にできないんだと改めて実感した。

全員：それは確かにある！（笑）「あ、できないんだな、本当に」って感じた。

Q2. 教育実習に行くにあたっての準備で大事なことは？

平：先輩方や先生のアドバイスの中で、これが一番だなと思ったことは、黒板に字を書く練習かな。本当にあればかりは3週間ではうまくならなかったし、そこが生徒からの一番大きな指摘だった。

斉藤：結局、教育実習は始まってみないと、指導教員の先生がどんな授業してるかなんてわからないから、授業の準備とかイメージとか持つよりは黒板に字を書く練習の方が良いよね。

亀井：確かに。黒板の字は自分ではきれいだと思っても、生徒からは本当に読みにくいって言われてしまった。学校の先生方は速く、しかもきれいに書いて本当にすごいなって思った。

仙道：私の場合は教科書の読み込みかな。特に発音を完璧にしないとダメだなって。rとlの発音などは、結局正確には出来てなかった気がするし、大学の授業の中であった発音の課題などはもっとしっかりとやっておけばよかった、と後悔していました。あと、教科書を読んで、どんな質問が出てくるかをしっかりと考えておかないといけないなと思った。質問に対してはすぐに答えられる方が良いから、前もって考えておくことが必要だと感じた。

Q3. 最後に今後教育実習へ行く後輩へのメッセージをお願いします。

平：教育実習生は難しい立場です。生徒との距離は必然的に近くなりますが、学びに行っている立場なので、そこはき違えないようにしなければなりませんと思います。でも、楽しむところは楽しんでください。良い経験になり、人として成長することが出来ると思いますので。

斉藤：実習までに学んだことを生かして頑張ってください。事前準備はしっかりしておく気持ち少し楽になるので、意識して努力を続けてください。

亀井：勉強は辛いかもしれないですけど、夢を諦めず頑張ってください！

教育実習は楽しいことばかりではないというのが4人の共通した感想です。大変な思いをした学生もたくさんいます。しかし、みんなが変わったのは、人前で話すということが出来るようになったということだと思います。人として成長することが出来るのも教育実習の1つの魅力だと思います。周りに教育実習に行く方がいたら、ぜひ励ましの言葉をかけてあげてください。それだけでも頑張れます。

これから教育実習に行く皆さんはこれを読んで少し不安になったかもしれません。教育実習は、指導教員の先生からしたら自分の授業時間を奪われるだけでなく仕事も増えます。しかし、実習生に熱意があれば、それが指導教員の先生に伝わり、親身になって様々な問題の解決口を見つける手助けをさせていただきます。大変だとは思いますが、その先に得るものの大きさを考えて頑張ってください。



（英語英米文学科4年 平和樹）

「学生メンター」知っていますか？



学生メンターとは、学生が充実した学生生活を送ることができるようにサポートする学生ボランティアスタッフのことです。科目の履修方法や一人暮らしのさまざまな悩み、友達づくり等々、学生生活で困っている学生の相談に乗ることで、相談してきた学生が自分自身で問題を解決し、自立できるようにするのを目標としています。活動内容は相談活動が中心ですが、学生からの要望を受けて実施するイベント企画・運営活動もまた、学生メンターの主な活動となっています。

昨年度から10月下旬に文庫キャンパスで開催されている Halloween イベント “Bun Bun Trick Festival” も、「文庫キャンパスにも学校祭がほしい！」という学生の要望に応えるべく、私たち学生メンターが企画し、運営しているイベントです。夜のキャンパス内の電気を消し、きもだめしをしたり、おばけに変装して窓にらくがきをしたりと、文庫キャンパス全てを使って催されるこのイベントは、他キャンパスからも注目され、例年多くの学生が参加しています。

その他にも、学生同士の交流を目的とした賑やかなイベントが盛りだくさんなので、是非一度参加してみてください。もちろん、相談もいつでもお待ちしております。

(英語英米文学科3年 石橋 祐貴)



英語勉強法

自身の英語学習法、授業の活用の仕方について4年生の小山さんに紹介してもらいました。

僕は大学時代に英語力を上げてTOEICで良い点数と、卒業までに英検準1級取れたらいいなという目標を持っていました。ですが正直に言うと、単語帳を買ってそれを全部覚える以外に、これといったTOEICや英検の勉強はしていませんでした。資格試験を重視した勉強をしていなかったにも関わらず、大学4年間で英語力を上げることができたのは、授業とその復習を大切にしていたこと、先生方がサポートしてくれたことだと思います。

授業に関しては、1年次や2年次の英語必修科目以外に5群の英語専門科目を積極的に入れるようにしていました。僕はWritingやReadingよりもListening関係の授業を中心に英語を学んできました。Listeningの授業では聴き取る訓練、聞き取った英文から文法事項や新たな単語を学ぶこと、音読などが非常に効率よく勉強出来ると思います。そして学んだことを何度も振り返ることで完璧に自分のものにすることを目指しました。そして、僕がTOEICで900点の大台に乗ることができたきっかけとなったのは、多湖先生のInterpretationの授業でした。この授業ではShadowingをひたすら繰り返しますが、自分にとってはShadowingが英語勉強法の中で一番難しく感じました。ですが、楽をして英語力向上は絶対不可能だと思うので、英語力の基礎をしっかりと固めて更に上を目指したいと考える方にはキツイですがお勧めの授業だと思います。

また、僕は大学の先生のお借りすることも重要だと感じました。授業以外で自分の英語力向上のために様々なサポートをして下さった先生2人がいます。それは多湖先生と僕のゼミの草山先生です。多湖先生は、学生の英語力向上のために良い意味で厳しい授業を展開してくださり、上を目指そうと考えている学生にはその人に合った的確なアドバイスをくださいます。僕自身も毎週の授業だけでなく、空き時間に出来るような英語勉強方法を伝授して下さいたり、英検の面接対策に付きあって下さったりと非常にお世話になりました。また草山先生も、英語力向上のために同じ映画を何回も英語で観るといった勉強法を教えてくださいました。さらに認知言語学がご専門である草山先生は英語の微妙なニュアンスの違いや、英文法を詳しく教えてくださいましたし、放課後にTOEIC勉強会も積極的に開催してくださいました。こういった先生のサポートがあったからこそ、途中で煮詰まることなく英語の勉強を続けることができたのだと、本当に感謝しています。

(英語英米文学科4年 小山 雄大)



お世話になった多湖先生と

就職活動体験談

今年も前年同様、3名の方からそれぞれどのように就職活動を行ってきたのかをインタビューしました。



東映 CM 株式会社に内定…高橋かのうさん

就活中は、とにかく様々な会社の説明を真剣に聞き、自分の知らない世界を洗いざらい見ておこうと考えました。

自分には、特にこれがやりたい！という事がなかったので、逆に自分の可能性を限定することなく、幅広い分野に視野を広げることが出来たと思います。

一番力を入れたのは、「4年間やってきたこととその社会に入ってやりたいことを、会社が求めている新入社員像とどうリンクさせるか」をよく考えることでした。

私は4年間テニス部に所属し、主将を経験しました。そこから何を学んだのかを頭の中で整理し、社会に出てからその経験をどのように活かしていけるのかをじっくりと考えて、

会社が求めている人物像と繋げていく作業に時間をかけました。

あまり飾らないで素の自分でいることです。私の場合は、自分にあったペースで無理せずリラックスして就活に取り組んだことが良い結果につながったのだと思います。

株式会社エイチ・アイ・エスに内定…羽鳥みずきさん

就活で力を入れたことは、ずばり企業研究と自分のやりたい事を明確にすること！

就活を進めていく中、企業研究が如何に大切かということに気が付きました。今だから言える話ですが、あまり興味がない企業の選考の際、企業研究をほぼしないでいったら、案の定面接は全然ダメでした。しかし、自分が入社したい！この会社でこういう仕事がしたい！と明確にイメージできた企業には、自然と何日もかけて企業研究を行うことができ、面接も上手くいき、選考に進むことができました。余談ですが、私流の面接のポイントは、文章を丸暗記するのではなくキーワードで言葉を覚え、面接の際に自分で文章を考えながら説明する方が上手くいきました！



就活中は正直すごいストレスがかかっていました。だから私は息抜きの時間というのを必ず週に1、2回作り、就活仲間の友達とご飯を食べに行ったり、家族と日帰り旅行に行ったりしていました。毎日就活がある訳ではないので、この時間を大切にメリハリのある日々を送ることで大変な時期も頑張れました。みなさんも上手に息抜きしつつ、前を向いて就活を成功させて下さい！



株式会社エスシーに内定…段坂英明さん

私が就活で力を入れたのは、まず行動することでした。少しでも興味を持ったなら説明会を受ける。やったほうが良いと少しでも思えることは小さいことや難しいことでもやってみる。単純なことですが、就活中行動してみて無駄になったことは一つもありませんでした。色々な業種、業界の説明会に参加し知ることは、自分が希望する職種の良いところ、悪いところを知る上でとても役に立ちました。選考で失敗した経験も次へのチャレンジの糧になったと、今でも感じています。

自己分析はとても大切だと思います。自分にはどんな適正があって、どんな会社に入りたいのか。また入った後何がしたいのか。自分自身をしっかり理解していないと企業や人に伝えるのは難しいものです。就活開始まではまだ時間があるので、しっかり考えてみてください。みなさんがやりきった！と思える就活ができますように！

2016年卒業・修了者対象 学内企業説明会

2016年卒対象・学内企業説明会 2月10日(水)・3月15日(火)
(全日程 14:00～16:50 予定)

神奈川県中小企業家同友会・関東学院大学共催
場所：金沢八景キャンパス

※日程が変更になる場合もありますので詳細は就職支援センター掲示板、KGU 就活 NAVI の掲示でご確認ください。
問い合わせ先：TEL: 045-786-7017 (金沢八景キャンパス就職支援センター)



2015 年度英語英米文学科 卒業論文発表会

今年度、英語英米文学科に提出された卒業論文の発表会を開催します。来年卒業論文を書く3年生はもちろん、卒論ってどんなものだろう?と思っている1、2年生も是非ご参加を!

もちろん他学科の方や先生方も大歓迎です。

日時：2016年2月2日(火) 13:30～

場所：K-123 教室



英語英米文学科生対象

TOEIC-IP テスト 実施のお知らせ

実施日：2016年2月2日(火)

2015 年度卒業論文発表会同日開催

時間：9:20～12:00(予定)

場所：K-310、311 教室

受験費用：無料(2・3・4年生対象)

英語英米文学科ゼミナール連合会

Vista No.4

▼ゼミナール通信第4号をお届けする。紙面は、国際交流に関する記事が多いものとなった。カピオラニ大学との協定調印式、留学体験記、交換留学生との交流、バディ体験等々である。これら国際交流の記事が増えたことは、本年度より本学科が所属する文学部が国際文化学部へと生まれ変わったことの実質的な変化を表しているのではないだろうか。英語や英米文学を学ぶことは、専門知識だけでなく、英語圏に暮らす人々の文化や歴史を理解していくことだと思う。学部の改組により、これまで以上に国際交流のプログラムが増えることで、英語圏の文化に直接的に触れる機会が多くなり、より実践的な学習環境になっていくことをうれしく思っている。

▼来月には英語英米文学科の卒業論文発表会が実施される。私たちが大学での勉学の総まとめとして取り組んだ卒業論文の発表の場である。皆様には是非参加して研究成果を見ていただきたいと思う。

▼最後に、発行に当たり多大な協力をいただいた福圓先生、なまためプリントさんにはこの場を借りてお礼を申し上げます。

(レイアウト編集係 英語英米文学科4年 遠藤 玲奈)

▼This year, we have completed the fourth edition of the English Department Newsletter. This edition has more articles about international exchange than before, such as the establishment of a study-abroad relationship with Kapi'olani Community College, a discussion of studying abroad, an exchange with foreign students studying in KGU, and a report of experience as a buddy. I think such articles increased as a result of the change of name from the College of Humanities to the College of Intercultural Studies. To learn the English language or British and American literature is to understand the culture and history of English speaking countries, not only to learn knowledge of a particular field of study. Thanks to this reorganization, programs of international exchange have increased and we can understand cultures more directly. I'm glad to be in this more practical environment of learning.

▼Next month, the English Department will hold the presentation of graduation theses. It will be a chance to present our graduation theses as overall summaries of our university studies. I hope you can come and see the results of our studies.

▼Finally, I was greatly helped by Assoc. Prof. Fukuen and Namatame printing company. I really appreciate their advice.

(Rena Endo)

The English Department Newsletter Vol.4 (英語英米文学科ゼミナール通信第4号) 2016年1月12日発行

編集：関東学院大学文学部英語英米文学科

編集協力：関東学院大学文学部英語英米文学科ゼミナール連合会

〒236-8502 横浜市金沢区釜利谷3-22-1 TEL. 045(786)7179 URL: <http://www.univ.kanto-gakuin.ac.jp>

印刷所：株式会社なまためプリント 〒231-0006 横浜市中区南仲通4-43 馬車道大津ビル TEL. 045(641)8080